

Surgical Outcome after Sleeve Pneumonectomy for Thoracic Malignancy: A Comparison Between Salvage and Non-Salvage

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2024-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今清水, 恒太 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003075

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2542 号

Surgical Outcome after Sleeve Pneumonectomy for Thoracic Malignancy: A Comparison Between Salvage and Non-Salvage

胸部悪性腫瘍に対するスリーブ肺全摘除の手術結果:サルベージと非サルベージの比較

今清水 恒太 (いましみず こうた)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、当院でのスリーブ肺全摘除 (SP) の経験をまとめた報告で、サルベージ症例と非サルベージ症例を比較することでサルベージ手術の妥当性を検討したものである。

【新規性、創造性】 2018 年の日本胸部外科学会の年次報告によると、スリーブ肺全摘除 (SP) は年間 10 例にしか施行されていない。したがって、この手術の経験を積んだ施設は少ない。また、サルベージ症例と非サルベージ症例を比較した報告は少なく、特に国内の施設からの報告は過去に無い。

【方法・研究倫理】 2008 年 5 月から 2023 年 3 月までに当施設で施行された中枢型の肺癌と転移性悪性腫瘍に対する 34 件の SP を対象とした。化学放射線療法後または緊急症状が存在する場合のサルベージ症例 19 例と、根治を目的にした非サルベージ症例 15 例に分けて検討した。本研究は倫理委員会で承認済みである (承認番号 E23-0118)。

【学術的意義】 多くの施設が経験不足であり、SP を実行可能な選択肢として検討出来ないことがある。本研究では、合併症の罹患率は比較的高かったが、30 日死亡率は非サルベージではゼロ、サルベージ群では 12%であった。手術のリスクや予後等を明らかにし、その安全性を示した。

【考察・今後の発展】 SP は腫瘍の進行や症状の悪化を待つのではなく、無病生存期間の長期化と症状の軽減を通じて QOL を向上させる選択肢であると考えた。サルベージ SP は、死亡率と術後合併症率が許容範囲内であり、長期的な結果が期待できるため実行可能と考えた。今後はさらなる症例の集積や、他の困難手術の成績を研究することで、呼吸器外科学の発展に寄与することが期待される。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。